

Title	<批評・紹介>李贄：十六世紀中國反封建思想の先驅者 朱謙之著
Author(s)	島田, 虔次
Citation	東洋史研究 (1956), 15(2): 260-268
Issue Date	1956-10-20
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145880
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

のであるが、もし附表の中に、そのようなものが含まれているならば、今後は是非それを發表していただきたいと思う。

六朝史には多くの難解の語彙がある。灼然・起家・職人・四姓・等々、我々は絶えずこうした言葉に苦しめられて来た。本書には隨所にそうした語彙の解説がある。この一語一語について、博士がどれほど苦心をされたか、想像に餘るものがある。本書卷末の制度史用語索引は、今後、六朝史を讀む人にとっての最良の手引をなすであらう。

本書の通讀と紹介のために私に與えられた時間は僅かだったので、一々原典に當つて意見をのべることはできないのは残念であるが、思いつき程度のことを言えば、たとえば、九品官人法の起源など、地方における人口移動がはげしく、地方官が最良の人材を推舉しがたくなつたというようなことも考える餘地はあるまいか。また宋の勲品を説くに當つて、この勲品の名が何に由來するのかわいことなども詳説してほしかつたと思う。また北魏の氏族詳定に關して、著者は柳芳の論に「郡姓者、以中國士人、差第閥閱、爲之制……膏梁・華腹・甲姓・乙姓・丙姓・丁姓……凡得入者、謂之四姓」とあるのを引いて、柳芳が甲乙丙丁の四階級を四姓と考えていたと言われるが、唐會要卷三六氏族の條を見ると、過江の僑姓・東南の吳姓・山東の郡姓・關中の郡姓・代北の虜姓の夫々につき名族數家を列舉したあとに「各於其地自尙其姓爲四姓」とあつて、四姓と甲乙丙丁等とは全く對應させられていない。この點、四姓の解釋にもなお檢討の餘地がありそうである。しかし「私がち出した結論はそれを撞き崩すのはいと易いのである。併しそのあとに新しい別の體系を立てることは恐らく容易なことではないであらう」という著者

の自負の前にはこのような部分的な疑問の羅列は大した意味をもたないかも知れぬ。だが博士の全體系を批判し、あるいは別の體系を提出する力は、いまの私には全くないことを卒直に告白せねばならぬ。思うに博士の尊敬すべき體系は、一に郷品と起家官とを結ぶところから生れてゐる。そしてこの着想のヒントとなつたのは、洪飴孫の「三國職官表」であつたという。博士はそのことをはしがきの中に述べて、「史料の整理と史實の考證は結局誰かがやらなければならぬものである」と言われた。私はいま、この書に對する本當の批判ができるようになるまで、洪氏や宮崎博士の辿られた道を謙虛に追つてゆくことを心に期するのみである。

(せつかくの名著に誤植のや、多いのは惜しまれる。一一四頁表の魏志卷廿一は廿二に、一一五頁表13の魏書は晉書に、一一八表9の郤縠・郤鑾は共に郗姓に、二〇八頁表の郤曇晉書卷六八は郗曇晉書卷六七に、四五七頁表1の裴延儒は裴延偶に、四五八頁表3の李興業は李業興に、五〇〇頁表桂國大將軍は柱國大將軍に改むべきであらう。また一七〇頁八行晉書卷卅八は卅七に、三二三頁七行の流内七班は流外七班に作るべきかと思う。その他の細かい誤植と共に、再版の際の訂正を希望する。)

一九五六・九・八(守屋美都雄)

李 贇——十六世紀中國反封建思想的先驅者

朱 謙 之 著

一九五六年一月 湖北人民出版社
B6版 九〇頁 二角八分

本書は最近中國に續出する歴史人物紹介の小冊子の一であつて、

分量の點からいって必ずしも大作とは稱しがたいが、さりとて單に智識普及をねらったのみの通俗書では決してない。一九五四年六月、北京大學中國哲學史研究室が科學週間を催した際、著者の提出した報告に修改を加えて成ったのが即ち本書にほかならぬ。事實、本書には學問的意味に於て注目すべき野心的な試みが一二に止まらないのである。周知の如く中國史研究に於ける最近の論題の一はいわゆる資本主義萌芽の問題であり、その萌芽の時期としては明の中・末期（嘉靖萬曆時代）が考えられているが、わが李贄、すなわち中國思想史上の怪物たる李卓吾（1527-1602）の生存し活躍した時代こそまさしくこの獨特の時代なのであった。『萌芽』問題は今日までのところ未だほとんど社會經濟史的分野でのみ論ぜられているけれども、その關心が一たび思想史精神史の領域にむけられるならば、李卓吾の如きは研究の最大の對象となるべきものと豫想せられる。朱氏の本書はこの様な明確な關心に立つて書かれた（萌芽論が萌芽論として日程にのぼった時期から考えてこのように斷言するには多少の危懼をも感ずるが）卓吾研究の最初の專書なのであって、本書の意義はまず此の點にみとめることができるであらう。

第二にあげておかななくてはならないのは、その分章整理の功である。本書は次の八章二篇より成る。

- 一、李贄生平事略 二、李贄思想產生的歴史條件 三、世界觀
- 四、社會觀 五、歷史觀 六、反封建專制思想 七、反道學與主張思想解放 八、李贄思想的局限性及其影響 參考原始資料目錄 後記。

各章は更に細分せられて、例えば第四章『社會觀』は更に、一、人

明が加えられている、といった風である。すなわち、ある意味では李卓吾思想項目要覽とでも言うべき性質を、本書は備えているのである。もちろんその分章分項の實際については異論もあり得ようが、しかしこの様な工作は研究の前進の爲めにはいずれば誰かに依て試みらるべき筈のものであって、朱氏の勞は多とするに足る。

第三の特徴として卓吾よりの引用をつとめて廣範圍にし、例えば水滸傳、三國演義に對する批評、『墨子批選』、後に問題とするはすの『疑耀』など、これまで餘り引かれなかったものを引用するに努めている點。『後記』にも書かれている如く卓吾の書は今日かならずしも見やすいものではないのであるから、氏のこの配慮は、卷末の參考原始資料目錄すなわち現存卓吾著書目錄にいちいち所在を注記せられた點とともに一貢獻たるを失わないのである。（もつとも、所在といつてもすべて中國に於けるそれであり、我々にとつてはさしあたつての役にはたたないが。猶、『續焚書』の如き、我國には數部を現存しているし、容肇祖氏はまだ盛に引用しているものであるのに、『今佚』と註記せられているのは注目をひく。）

第四の特徴として私はその論斷のよくもわるくも大膽新奇なる點をあげたいが、その具體的な例は以下の細説のうちにゆずりたい。もつとも、細説といつても八章全部について紹介と批評を行う煩にたえないから、ここでは單に第二章のみをとりあげることにする。

「李贄の思想の出現は、中國近代に於ける新舊思想の闘争の開始である。彼以前では、中國の思想は封建社會的意識形態が主であった。彼以後には、封建社會的意識形態の中に、すでに、自由解放的な市民的思想が芽ばえてきた。この傑出せる思想家は小地主的思想を反

映しているとともに、また市民的思想をも反映している。彼は自己の市民的思想によって、中國の傳統的封建意識形態に對する對立を開始したのである」。(本書十六頁)

第二章は此の言葉を以て始まり、かかるものとしての李卓吾の思想がいかなる歴史的背景から生れたかを、經濟背景、政治背景、文化背景の三項に分つて論ずる。

一、經濟背景。(1)、明の嘉靖萬曆の間、封建經濟分解の兆は特に東南沿海の一帯に顯著となつたが、その由來は、古くから外國貿易の中心であつた此の地方に新たにヨーロッパ商人が來航はじめ、また倭寇貿易が盛行するに至つたことにある。ここに於て政府の傳統的海禁閉關政策は「沿海商人と一般民衆の、對外貿易の自由への、また政府が開關政策に轉じ、僑民の海外發展を保護すべきことへの要求」、「封建地主統治階級の束縛を打破しようという」願望を呼びおこすに至つた。「これが思想に反映して、自由解放を要求し、商人資本の利益を代表する市民的思想運動となるのである」。(2)、對外貿易による貨幣の富の増大は貨幣經濟化の趨勢を決定的ならしめ、税制方面に於ては一條鞭法という大變革をひきおこした。これらはいずれも南方の新興商人に對して適合的であり北方の封建地主集團の利益には合しなかつたのであつて、ここに豪族地主と新興商人との間の矛盾が生れることになつた。(3)、また貿易、工場手工業、貨幣經濟の發展は、農村經濟の分解を促し、土地は集中の度を加え、封建地主の農民搾取は日に日に深刻となつていった。「まさしく明末農民起義の前夜、そしてそれがまた李卓吾思想出現の社會經濟的背景をなすものにはかならない」李卓吾が生きた時代的主要矛盾はかくの如きものであつた。これらの諸矛盾に對應する李卓吾の思想を

求めるならば、(1)については彼は對外貿易に對して反對ではない。(2)豪強地主と商人資本の矛盾に關しては、はっきりと商人に對して同情的である。(3)地主と農民との矛盾に關しては農民を支持する。そのほかなお(4)大地主と小地主との矛盾については、卓吾は小地主の立場に屬するものとせられる。

二、政治背景。この項については朱氏はただ倭寇の一事をあげるに止めている。卓吾は三十四、五歳のころ郷里に於て數ヶ月にわたる倭寇の包圍を経験し、自から防戦に参加し、また食糧難に苦しんだ。彼が武學を提唱し、又、例えば『焚書』の處處に於て文武官僚の腐敗無能をばげしく攻撃しているのはこの際の深刻な印象に基くとする。

三、文化背景。(4)當時の思想界は朱子學と陽明學とが對立していたが、卓吾は「朱子は夫子に非ず、王陽明の學こそ眞の夫子」として陽明學をとる。朱子學は大地主階級の意識形態を代表するものであり、陽明學は小地主階級の意識形態を代表するものである。(5)卓吾は單に陽明學派に屬するのみでなく、更にその左派に屬する。陽明學左派は所謂英雄豪俠の一派であつて、彼等はおおむね中層もしくは下層階級の出身であり、封建的傳統な思想形式の打破と個性の解放とを要求し、その内には例えば王心齋の如き農民的思想、顏山農、何心隱の如き市民的思想をふくむ。卓吾はその思想に於て明かに顔・何の影響をうけているのである。

以上の二つのほか、卓吾思想の文化的背景として朱氏は更に(6)佛教老莊の影響、(7)墨子の影響、(8)張居正の影響、(9)利瑪竇の影響、などを列舉し、「李贄は異端の集大成者であつた。彼は誰よりも早く、敢て率先して墨子を提唱し、また『孫子參同』を著した。四百

年前に於て大膽にも諸子百家の學を提出し、子書は經書に如かずという正統的見解を批判した。この點のみにについて言つても、彼は近代反封建思想の先驅者に擬される十分の資格があるのである」という評語を下しているが、その一一の説明はすべて他章にゆずられてある。

以上が第二章の内容のあらましである。以下に多少の批評を加えてみよう。

一の經濟背景の項に於て、東南沿岸の特殊性を指摘せられたのは頗る重要な着眼であるといわねばならぬ。卓吾は福建省泉州府治所在地たる晋江縣の「沒落小地主の家に生れ」、恐らく三十歳のころまでその地を離れないが、この地が古くより貿易の中心地であり、殊に明代嘉靖年間に於てはこの邊一帯がいわゆる「漳泉」(漳は漳州)の地として密貿易と『海寇』との最大の中心地として當るべからざる氣概を有していたことは周知の事實である。(片山誠二郎『明代海上密貿易と沿海郷紳層』歴史學研究一六四)もちろん貿易商人の間に『市民』的意識があつたか否か、まだ斷言しうる段階ではないであらうし、前期的商人云々の議論もとび出して來よう。しかし例の朱統の事件などを考えるとき、彼らの間に通商互市の自由に對する強烈な願望があり、鋭い現實主義的な感覺が存在したことは否定すべからざる事實であつたと思われる。今となつてみればコロンブスの卵で當然の指摘であるが、また一般的な形では、實は早く魏氏も注意しているところではあるが(『左派王學』一二〇頁、朱氏のこの指唆——『萌芽論』の今日の段階ではこのほかに更に考慮すべき多くの條件があるであらう——は甚だ具體的でやはり大きな前進と

言わなくてはならない。郷里に於て空氣とともに呼吸したであろうこの様な意識が、その倔強な性格と共に卓吾の生涯を貫いてその全思想の基調となつていたと考えることはあながち不當ではなさそうに思えるのである。(猶ついで乍ら、卓吾の男女平等觀の背景にも朱氏はやはり『鄉村婦人……與男子雜作』という泉州地方の特殊事情を考慮している。四四頁)ただ然し、氏が經濟的背景に於ける四つの矛盾に對應するものとして、卓吾の四つの思想をとり出されたのは、その手續に於いて甚だ疑問があり、私としては(甲)の商人に對して同情的という點のみは承認できるけれども、(乙)についてはあの引用文からあの様な論斷を引きだすことはゆきすぎであると思われる。(丙)の小地主的というのは、文化背景の項で朱子學を大地主的、陽明學を小地主的——これは、中國學界の通説であるらしい——としてあるのと應ずるもので、第六章『反封建專制思想』の説明によると、封建的搾取に反對といつても、それは上司・官吏の横暴に對してのみであつて封建主義の基礎そのものに反對しているのではない、そのことを小地主的立場と呼ぶのであるらしい。李卓吾の「反封建」の本質は恐らくその通りであつたらう。しかしそれが「小地主的」というのは私にはすつきりとは納得できない。

政治背景の項が單に倭寇云云のみですませてあるのは、確かに、卓吾の書に於いて爲政者に對して最もはげしく憤懣の吐露されているのは倭寇や邊寇に關してではあるけれども、その時代が嚴嵩、張居正、東林黨など政治的事件の連續であつたことを考えるとき餘りにあつけない。然し此については今は追求しないとして、最も問題になるのは次の文化背景の項である。先ず第一に、卓吾が陽明學中の左派に屬する一證として「彼の編した『陽明先生道學鈔』八巻のう

中には傳習錄が入っていない。(是沒有傳習錄的位置的)このことは、同じ陽明學といううちに、右派が傳習錄の信徒であるのに對して、左派の重んずるところは陽明先生の功業であつた、傳習錄は假道學であり道學鈔に見ゆる「英靈漢子」こそ眞道學ということである」という説である。私は『道學鈔』なるものを未だ見ていない。したがつて傳習錄の位置がない、ということの意味がはっきりわからないが、陽明には傳習錄以外に所謂論學の書簡や序記の類は夥しくある、それらも採られていないのであろうか。もしそれらも一切採られていないとすれば、たしかに注目値する事實であるが、論學書の類が採られていないとすれば、話は別となる。そうして私は實は採られていないに相違ないと信じているものである。私には氏がこのような説をなされた背後には、解放後中國に於ける陽明學に對する否定的評價という特殊な事情があるように思われる。否定的評價の原因としては二つのものが考えられるであらう。一は陽明が兵を提げて所謂農民起義を討伐したことに對する反感(臺灣に於ける陽明崇拜に對して中共では彼はむしろ劊子手である)二は陽明の哲學は『主觀唯心論』(すなわち主觀的觀念論。此に對して朱子學は普通、客觀唯心論とせられる)であり、主觀唯心論は進歩的意味をもち得ない、という考え方。然も一方では陽明學左派の方はあくまで肯定的に評價しようとするから、ここに無理がおこり、左派は師の陽明に(意識的に)そむいたものであるとか、陽明の唯心論を左派(例えば王心齋)は唯物論に轉轍した、とか言う強引な説がうまれるのである。然しながら上に言つた二つの原因なるものは甚だいわれがない。それは今日の段階に妥當する(私はマルクス主義者ではないが、マルクス主義中國では恐らくそうなのであらう)評價基準を過去の時代に

一律に押しはめようとするものに他ならない。名教と合體し、あの驚くべき完結性をもつた朱子學のキエチズムが支配的となつて以後の中國に於いては、それに挑戦しそれを突破せんとする所謂主觀唯心論こそむしろ逆に進歩的意義をもつていたのである。陽明以後清末の譚嗣同に至るまで、舊制度への最も鋭な批判、最も深刻な呪咀は殆どすべて主觀的唯心論の側より放たれていたのである。それは革命をしてよく終あらしめるものではないかも知れない。然し少くとも中國に於ては革新の始動をなすものであつた。(譚嗣同の哲學をそれがヨーロッパ科學の以太の語を基礎概念に用いているという理由で唯物論(或はせいぜい「唯心論の尻尾をつけた唯物論」なりと解する一部の説の皮相なること、王心齋を唯物論者なりと斷ずるの全然根據なきと等しい。)(なお、特にここで私の根本的立場をことわつておきたい。進歩的とはもちろん發展段階的の意味で言うのであるが、ただその場合、私は『萌芽論』の重要性は充分にとめながら、然もヨーロッパ資本主義の衝擊がなくとも中國は自生的に資本主義に入つたであらうというまでの考はもち得ないのである。史學雜誌六一の九、拙稿を参照)この點については、いわゆる佛老の影響という點と併せて著者の再考を要請したい。佛老の影響といううち佛教(禪)については第三章に於て卓吾の世界觀の唯心論的側面の一要素(即ちマイナス面)として言及され、またその眞空の説が解説されている程度であるが、私は満足できない。のちの譚嗣同、章炳麟など或は禪、或は華嚴、或は唯識と宗派は異なるがすべて佛學に深かつた。これらとの比較に於て急進的思想と佛教との關係は從來の如くそのネガチヴの面に於てのみでなく、ポジチヴな面について深く検討さるべきものがあると思われる。佛教はたしかに

一面に於て彼らの思想を收拾しがたいまでに汪洋放恣ならしめたであらう。然し例えば『仁學』の如き、その積極面に佛教の寄與なしと斷言しうるであらうか。いま李卓吾の場合、よくもわるくも禪のもつアリズムそれは思辨の極度の浪漫性とうらはらを爲している）

とそれに支えられる所謂「心力」とを無視することは到底できない。佛老の老の方の影響としては、卓吾が民を愚にする無爲の治を説いた點が主として考えられてゐるのであらう。（第五、六、八章）これは恐らく正當な指摘である。然しこれを一概に今日の眼から見ても『反人民思想』とし、『その人民思想と矛盾する』（第八章第三節）とみることは如何であらうか。もちろん彼は彼流に人民の爲に考えていた。彼にあつても政治はあくまで人民の幸福の爲のものでなくてはならなかつた。しかしそう考える彼の立場そのものはあくまで士大夫の立場であつたのであり、人民の爲に——この言葉がいま唐突でないならば——彼が求めたのは何よりも強力にして有効なる政治であつた。それがあの時代、あの國家に於けるむしろ健康なマキアベリズムでなかつたと果して斷言できるであらうか。卓吾が張居正に心服したのは正にこの點であつた。張居正の言に

『天下のこと極まれば必ず變ず、變すれば則ち始に反る。これ造化自然の理なり。漢唐を歷て宋に至りて文弊すにて甚しく、天下日に矯僞に趨く。宋は頽靡の極なり。その勢かならず變ず。かくて胡元となれり、元は先王の禮制を一舉に蕩滅し、獨り治むるに簡を以てせり。此れ古に復するの會なり。然れども元は久しきこと能わすして本朝これを承く。我が朝廷の治の簡嚴質朴なるは實に元をかりて驅除となしたるなり。然るに近時迂腐の輩は依然として晚宋の弊習を祖として、妄りに我が祖宗の建立したまいし

ところを議するは、治理を知らざる者なり』。

『三代より秦に至れば、これ渾沌の再び闢けしものなり。その創立せる法制は今に至るも守りて利となす。史に稱す、それ聖人の威を得たり、と。……わが高皇帝は神武もて天下を定めたまい、その治は威強を主とす。前代の繁文苛禮、亂政弊習、剗削して殆ど盡く。實に秦法よりも嚴なり……二百餘年を歷ると雖も、海内人心、晏然として搖がず、これ威を用いし效なり。腐儒時變に達せず、ことごとくに三代を稱し……』（張文忠公全集、文集十一、なお文集三、辛未會試程策に、戾于時、拂于民、雖聖哲之所創造、可無從也、といつて『後王に法る』ことを強調しているのを参照）とあるのを、朱氏も引かれた卓吾の『兵食論』とくらべられたい。

范仲淹いわく、儒者は自から名教あり、何ぞ兵を事とせん、と。實に兵の急務なるを知らざるなり。張橫渠は田を一方に買い、井田を行わんとす、これまた井田の何事たるやを知らずして徒に古を慕うことを標榜す、ますます醜態なり。商鞅は之を知り、慨然として請うて行い、専ら攻戰を務め、決するに信賞必罰を以てす。秦をしてはにわかに強からしめんとしたるに、慘しくも車裂の刑にあい、しかも秦民に哀まれず、これ知らしむべからざるものを知らしめんとしたる結果なり。されば「聖人の道は、以て民を聰明ならしめんとには非ず、まさに以て愚にせんとす」（老子六十五章）「魚は淵を脱すべからず、國の利器は人に示すべからず（同、三十六章）」とは深遠の言なる哉。歷世これを寶とせり。太公望これを行えり。管仲これを修めたり。老子これを明かにせり。周公よりしてのち、流れて儒となる。紛紜として制作し、民を聰明ならしめんと務む。瑣屑煩碎、信誓に汲汲たり。かくて軒轅氏の

政ついに衰う。

第三に、墨子の影響ありとは、第五章に卓吾の歴史観として四ヶ條をあげたうち、歴史上の人物を評論するに實用（實踐、または有効性）を以て標準となすの一事、並に第八章に於て卓吾思想の制限をなす矛盾を三つ挙げたうち、『無神論と有鬼論の矛盾』というその有鬼論、この二が墨子（と利瑪竇）の影響をうけたものだと言うのである。なるほど卓吾に『墨子批選』の著述はある。しかし、右の二點が墨子の影響とは附會も甚しい。

第四に張居正の影響ありとは、第三章の世界觀の條に、卓吾の世界觀は唯物論と唯心論を調和せんとする二元論であり、二元論は要するに唯心主義であるといひ、その唯心論には『實に意外なことながら、當時の實行家張居正の影響をうけたところがある』として有名な『余をして創子手（首斬役人）たらしむるも、余は刑場を離れずして菩提を證してみせよう』という居正の禪學をあげているのが一つ、また第五章に、卓吾の一質一文・一治一亂の歴史觀は居正の史觀と合致する、恐らくその影響をうけたのであらうと言っているのが一つ。此も恐らく單に平行現象にすぎないのであつて、影響といふことはできまい。卓吾の史觀は卓吾の思想體系或は左派王學そのものの自然なる歸結であつた。問題はむしろ卓吾と張居正という同時代の左右の兩極端がすぐ前にもふれた如く然も同じく禪學に立ち同じ様な史觀をいだいていたという點にあるのである。

最後に利瑪竇の影響とは、第三章に卓吾の世界觀は、中國傳統哲學の影響のもとでは唯心論として現れ、氣が天地萬物の根本であることを認める點では唯物論的『方向』をふくむ、そしてこの氣による存在論という點では利瑪竇などに依つて輸入せられた西洋の初期科

學思想に接したことが（中國傳統の哲學とともに）影響している、というのが一。第六章に卓吾の反封建專制思想の「内容たる「友を以て命となす」という意識が、利瑪竇の『交友論』の「友は第二の我なり」という考えと關係があるとするのが又その一、及び既に言及した卓吾の有鬼説、すなわち焚書卷三の『鬼神論』の趣旨が利瑪竇の『天主實義』に同じいというのが又その一、である。しかしながら、此の何れに對しても私は贅意を表することはできない。氣の存在論については朱氏は「西僧利瑪竇の言に天地の間、ただ三行あり、水と火と土なり、と。また氣を以て一行となす。人すこぶる妄誕なりとなすも、余の思うに此れ利瑪竇の言のみに非ず……邵子いわく……葛洪いわく……張子いわく……利瑪竇の言妄誕に非ざるなり」という『疑耀』の言を引いている。（疑耀七卷は李贄撰と稱するがそれは誤で張萱の撰となすべきこと四庫提要（子部雜家三）に明證數條をあげて論じており、私も、通行本によるかぎりその説を信ぜざるを得ないのであるが、氏は『參考原始資料目錄』の疑耀六卷、原題李贄著、張萱訂、明刻本（清華大學藏）の條に提要の説は誤と注記した『説書』『疑耀』間有他人之説、偶混其中、應加以分別、と言っている。然し積極的な理由は全然示されていない。氏は理由を示すべきである）かりにこれが眞に卓吾の語であつたとしても、それは決して『影響』を示すものではない。そこに影響を見ようというのならば佛教の四大説にも影響を見て少しも不都合はない。元來、氣を存在の根本とみるのを唯物論と呼ぶならば、朱子學をも含めて中國傳統の哲學（佛教を除く）で一として唯物論でないものがあるうか。たしかに『ただ一言の道に近きものあれば、いかなる人物にも參禮した』のが卓吾である。然しながら要するに利瑪竇の學は『吾

が周孔の學』の比ではありえなかった（容肇祖氏李卓吾評傳四十頁に引く續焚書）卓吾を以て『眞理を西方國家に求めた』ものとすることはいまだできないであらう。卓吾の思想として氣の説をとりあげることの當否はいま問わぬとしても、私はむしろここで、陽明學と相い表裏して起つてきた、否その最も本質的な局面に於いてはむしろ陽明の主觀唯心論の必然の產物であつたとも言ふべき『氣の哲學』にこそ言及してはしかつたと思うのである。（山井湧氏『明清時代に於ける氣の哲學』昭和廿六年哲學雜誌）

次に卓吾の『朋友を以て命となす』という思想について。ここでも事情は同様である。利瑪竇を引用するスペースがあるなら、陽明學左派の間に一代は一代よりと高まつてきた此の精神について一言なりと言及すべきであつた。それは別の言葉でいえば俠の精神であり實は左派的に展開すべきものとしての陽明學そのもののらはむ精神であつたし、更に遡れば程明道の『萬物一體の仁』に源流を求めることができよう。今この點について詳説する餘裕はないが、本書が李卓吾思想の内容諸項をいわば横に開列したという性格の強い反面、それを縦に史的發展の相に於て、即ち大きくは少くとも宋以後の思想史の、小さくは陽明學の或は陽明風心學の必然的歸結として見ようという用意に甚しく欠缺、餘りにアトラダムに所謂『影響』なるものを求めすぎるといふ缺點は、かかる點に殆どナンセンスなまでに露呈しているといつてよい。有鬼論に於ける利瑪竇（或は墨子）の影響なるものについても同斷である。もし其處にあくまで『影響』もしくは由來を求めよとならば、むしろ當時の士大夫に普通であつた迷信的意識を以てこれにあつべきであらう。もちろん氏もいう如く李卓吾の有鬼論には一種シニカルな調子がある。そしてこ

の場合、私はむしろ氏が「朱子いわく、天は即ち理なり。……理は人人の同じく具するところ、若し必ず天子にしてはじめて天地を祭るべしとならば、是れ必ず天子にしてはじめて理を祭りうるなり。凡そ臣庶人たるもの理の祭りに與るを得ず、こんな馬鹿げたことがあらうか。もし然らば理なるものは大いに民の財を傷け、民の力を勞するのみにて、理など無い方がよっぽどましならずや」という焚書の語を引いたついでに、譚嗣同の「……中國は則ち然らず。府廳州縣、孔子廟を立つと雖もただ役人と生員とのみ之を祀るを得。農夫野老のごときは……」（『仁學』三聯版全集六十九頁）という言葉に言及してはしかつた。私は兩者の間に『影響』があるというのではない。然し墨子や利瑪竇を引くにくらべてはるかに深い必然的連繫が存すると考えるのである。

もっとも、譚嗣同に因んでいうならば、氏の敘述中には逆にメリットとすべきものがある點を擧げておかねばならぬ。即ち例えば朋友云に關して、利瑪竇への言及とともに譚嗣同『仁學』の『朋友は、五倫中、弊なくして益あるものの隨一』という一節を引かれた點は第七章に卓吾が欲・利・私を肯定したことを述べてそれが頑固守舊派の儉約説を反駁して奢侈の社會的効用を主張した譚嗣同の説と同様、商業資本の立場での經濟思想であり、卓吾はかかる思想の先驅者である、とせられた點とともに、甚だ我が意を得た敘述である。晚明思想と清末の革新的思想との間には類同の點が甚だ多い。譚嗣同の以太説と明中末期（より清の戴東原に到る諸氏）の氣の哲學、陽明學左派の游侠精神と清末志士の間に於ける任俠の強調（『仁學』六十一頁「翼教叢編」四、五）清末に於ける『學會』——即ち學問が本來的に共同的性格のものでなくてはならぬとの主張と明の『講學』

家に於ける同じ認識（「仁學」六十七頁、また治事篇。朱子「學」「講學」を以て稱せられるが、今までのところ私はその中にこのような明瞭な認識を見出してはいない）そのほか萬物一體の仁の説の復興といい、熱情主義といい、欲望肯定といい、名教批判といい、動あるいは變の強調といい、異端に對する包攝的態度といい、事項の類似のみを求めてもいくらでもある。（もし黃宗羲などの所謂遺老をふくめるならばまだまだ擧げることができよう）そしてそれは單なる事項的な類似というような皮相なものではないと思われる。誤解を恐れないうで、敢て直截に言えば明末と清末とは、思想史として抽象してみるとき殆んど直接に連續しており、一は他の發展という意味をもつのではなからうか。その間にはさまれる清朝というもの、その考證學というもの、この様な見地からその意味を考えなおす必要があるはすまいか。——私は朱氏がこの様な展望のもとに譚嗣同を引いたとは思わないが、平生このような考を抱いている者として氏の引用に甚だ興味を感じたので一言しておく。

小題大作の謗は覺悟の上、右を以て紹介と批評を終る。本書の長所は始にのべた如くであり、短所は批評中にのべた如く、中國それ自體の思想史體系を餘りに無視せられたところにある。張居正、利瑪竇との關係という重要な指摘もその爲めに何らの成果にも達していないのは甚だ惜しむべきである。本書について語るべき點はまだあろう。例えば黒旋風李逵についての卓吾の評價の如き、左派王學の人間像の到達した一典型としてもっとも吟味するに値するが今はただ第八章の中から次の二條を引くに止める。

一、『卓吾は一面では小地主階層の没落意識を反映して三教合一という玄虛思想を説くとともに一面では自由市民的な向外發展の新

意識、すなわち封建的傳統に反對する思想解放の氣運を反映している。……卓吾を研究するに當つてまずこの矛盾をめぐり出さなくては、その思想の眞價も、その思想の合理的な中核も容易につかめないのである』

二、『卓吾の思想の政治的影響という點についていうと、その著作は農民革命に對しても全く關係がなかったとはいへぬ。……水滸傳の明末社會への影響は實に卓吾によつて開かれたものであり、その「忠義水滸傳」は至るところで公然と起義を提倡している……』

本稿はもと本年七月、中共の史學論文を読む會であるところの新史學研究會で報告したものである。その際は解放後の此の方面での最初の書たる吳澤『儒教叛徒李卓吾』および侯外廬『論明清之際の社會、階級關係和啓蒙思潮的特點』（「新建設」一九五五・五月）の論旨にも言及し、かつ本書全篇の詳細項目表を配付したが今は都合ですべて削つた。稽文甫氏の「晚明思想史論」（一九四四、重慶）侯外廬氏の「中國近世學術思想史」（？）を未だに見えないこととともに遺憾とするところである。（島田虔次）

中國棉紡織史稿

嚴 中 平

一九五五年九月 科學出版社
A5 判三八四頁 三七〇圓

中國の棉紡織業については、今度の大戰の前から、中國民族産業の優なるものとして、中國内外の學者により、多くの實態調査がなされてきた。しかし當時これに携わつた中國の學者にとっては、これらの調査はただ單なる學問的興味に出發するものでなく、誇張して